私がなぜ現在の科目を選んだか

「消化器内科」

信州大学医学部内科学第二講座
柴　田　壮一郎

私が消化器内科を志したのは，以前より志望していたからということではなく，教えを受けた先生や環境に恵まれていたからだと思います。

小さい頃はよく風邪などでかかりつけ医にお世話になっていたこともあり，自分を診てくれた先生の様になりたいなと思い，漠然と内科系を志望していましたが，消化器内科を志すようになったのは研修医になってからでした。学生実習の時はそれぞれ2週間という短い期間の中で，その時に実習している科のことについて勉強するのに精一杯で，また診療科に対する興味も2週間ごとに移っていく状態であり，○○科が良かった，というよりどの科も良かったという印象でした。

研修先の篠ノ井総合病院の消化器内科では，指導して頂いた先生は朝から夜まで常に忙しく仕事をされていましたが，その合間を縫って丁寧に疾患や治療のこと，内視鏡的手技など多くのことを教えて頂きました。

患者層も急性期から終末期の患者さんまで幅広く，また疾患についても消化器疾患だけではなく所謂common diseaseも多くみることができました。

また，もちろん他の内科でも同様だと思いますが，私は消化器内科を研修して特に患者からの間口がより広く，総合内科的な要素を強く感じ，またそれに喜びを感じるようになりました。

例えばある患者さんがお腹が痛い，食欲がないといった主訴で消化器内科を受診することはよくあると思います。そういった症状をきっかけにして，そこだけに囚われず，些細な症状を見逃さず診断に至り，そして適切な治療を行い患者さんが元気になって帰っていく，これこそが内科の醍醐味だと思います。

またそれだけではなく，手技としてもESDやERCPを含む内視鏡，RFAやPEITを含む超音波，肝生検を行う腹腔鏡など多岐にわたり，専門性の高さと多種多様の疾患を診ることができる，すそ野の広さを併せ持った科であると思い，消化器内科を志すようになりました。

現在は消化器内科の中でもはさらに細分化され肝臓内科の分野で働いていますが，研修医の時の心を忘れないよう，「山は高く，すそ野は広く」をモットーに，専門性を持ちつつも一般的な疾患もみることができ，全身管理もできる医師となれるよう，一歩一歩着実に歩んでいきたいと思います。

（信大平20年卒）

私がなぜ現在の科目を選んだか

「糖尿病・内分泌代謝内科」

信州大学医学部内科学第四講座
宮　腰　若　菜

今回のテーマを頂き，私が現在の糖尿病・内分泌代謝内科を選んだ道筋を思い返してみました。実は学生時代は糖尿病に特段の興味は持っていませんでした。一般の方々のみならず，医療者もそうなのではないかと思いますが，むしろ糖尿病にはなんとなく地味なイメージを持っていました。研修で選んだのも，学生時代に信大の当時の加齢総合診療科（現在の糖尿病・内分泌代謝内科）を見学し，もう少しこの科について知りたいと感じたためと，内科医ならば基本的な生活習慣病について学んでおかねば，という気持ちからだったように思います。

しかしいざ研修が始まってみると，そこで私の糖尿病や内分泌疾患に対する印象は大きく変わりました。糖尿病の治療は患者さん一人ひとりの性格，家族構成などの生活環境，今までの人生まで考えて治療を行う必要があり，まさにオーダーメイド医療だったのです。そして具体的な方策を一緒に考えるなど，患者さん自身が治療方針の決定に主役として参加することができます。また，様々な科の勉強をするに従い，糖尿病がいかに多くの疾患のリスクとなっているかを実感し，早期に発見・治療することの必要性を強く感じました。日々の診療は確かに地味に見えるかもしれません。しかし，その毎日が将来の心血管や腎疾患，失明などQOLを損なう病態を防ぐことに繋がるならと大変やりがいを感じます。また内分泌疾患も大変興味深いです。人間の体をプールに例えると血中のホルモン濃度は「50mプールに水をいっぱいに張って，その中に小さじ1杯分のホルモンを溶かした濃度」と言われます。治療前後で別人のように元気になる患者さんを見て，そんなごくわずかなホルモンが私達人間を人間らしく保っているのだなぁと，感心したり少し怖くなったりします。まだまだ学ぶことが多いですが，一人ひとりの患者さんとの出会いを大切に頑張っていきたいと思います。

（山形大平22年卒）